

住宅における部屋の広さに関する意識調査

中 島 一 ・ 松 本 壯 一 郎

Inquiries of People's Consciousness

about the Extent of the Rooms in their Dwelling Houses

Hajimu NAKAJIMA, Souichiro MATSUMOTO

本報告は、諸室における広さ意識調査と、モデル空間における広さ意識の実験を中心に「空間規模と広さ意識の関係」「空間把握に影響を与える基本的要因と広さ意識の関係」を探り、住空間を構成する要因の影響力とその相互関係を求めようとするものである。

1. はじめに

我国における最近の住宅需要の現状は、昭和49年版建設白書によると、昭和43年以降の住宅数は、普通世帯数を上回り量的な住宅不足が解消され、また、質的な居住水準についても、健康で文化的な生活を営むことの出来ない低水準の居住条件にある住宅難世帯は、全世帯の10%を下回るようになった。

昭和48年12月に実施された「住宅需要実態調査」によると、全世帯数の35%に当たる1000万世帯の者が住宅に困っていると答え、その理由をみると「住宅が狭い」と答えているものが約半数でもっとも多く、次いで「老朽化」「設備不良」等となっている。

これらの、量から質への転換期にある住要求について、その問題点と方向性を探る各種の研究が報告されている。本報告は、種々の住要求から「空間規模のあり方」について検討するものである。

空間規模と人々の意識の間には、ある種の対応関係があり、その対応関係は、種々な要因が複雑にからみ合っ構成されている。そこで本研究は、図1に示したとおり、1)床面積、天井高、明るさの空間構成要因を変化出来るモデル空間による広さ意識の実験。2)諸室における広さ意識の調査。3)空間を構成する各種要因の整理。の3つを柱と考え、「空間規模と広さ意識の関係」「広さ意識に影響を及ぼす要因」を探り、住空間を構成する各種の要因の影響とその相互関係を求めようとした。

なお、モデル空間による実験は、住空間を一次的に規定する空間構成要素の意識への影響を探ることを目的と

し、諸室における広さ意識調査の結果から、生活歴・生活様式・生活意識等の違いにより変化する住空間特有の要因を探る手助けにするものである。

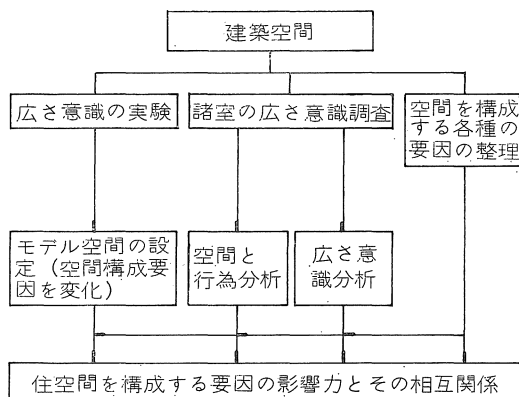


図1. 研究方法の概要

2. 調査内容と方法

住宅における諸室のうち、室内行為が比較的単調で明確な寝室・食堂・台所・浴室・便所について、広さ意識調査を行ない「広さ意識」「空間認識に影響を与える基本的要因と広さ意識」「モデル空間での広さ意識と諸室での広さ意識との関係」を求める。

a) 調査内容

調査票は、質問紙と平面図カードから成り、広さ意識に影響する各種の要因を広い範囲から把握出来るよう配慮した。質問事項は、家族構成・生活姿勢等の一般事項と寝室、食堂・台所、浴室、便所についての質問で構成した。各部屋については、部屋・収納スペースの広さ、

窓の大きさについての意識と共に、部屋の様式・使用形態・行為の種類・家具の種類についてたずねた。平面図カードには、部屋の有効床面積・形状・利用方法を知るため、家具の大きさ・配置等を記入願った。

b) 調査対象

調査対象住戸は、分析上、多種多数の住居が容易に得られる集合住宅を選び、質問回答者には住居内のマネージメントとしての役割をもつ主婦とした。対象地域には、虹ヶ丘・知立・藤山台の3団地を選び、平面構成を2K・2DK・2LDK・3K・3DKのタイプに計490戸配布した。

c) 調査日時と調査方法

調査日時は、昭和49年11月4日から10日までの一週間、質問紙調査法により実施した。

なお、回収率は85.7%であった。

表1. 調査対象戸数と対象家庭の平均家族数

住居形式	2K	2DK	2LDK	3K	3DK	合計
調査対象戸数	50	110	60	160	110	490 戸
調査票回収数	40	93	57	136	94	420 戸
回収率	420/490=85.7%					
対象家族の平均家族数	3.13	3.30	3.60	3.76	3.88	3.60 人

(注：住居形式 頭の数是个室数を表す。K：台所、D：食堂、L：居間)

表2. 諸室の生活様式

	和 式	洋 式	和 洋 折 衷
寝 室	398	2	20
食堂・台所	90	330	-
浴 室	380	0	40
便 所	209	211	-

表3. 寝室および食堂・台所で行なわれる生活行為

	接 客	団らん	娯 楽	趣 味	仕 事 読 書	子 供 の 勉 強
寝室で行なわれる就寝以外の行為	91	132	108	96	-	32
食堂・台所で行なわれる食事・調理以外の行為	207	263	-	104	46	16

休 息	就 寝	着 換 え	洗 面 化 粧	家 事 勞 働	育 児	洗 濯	兼 用 行 為 な し
156	-	233	-	91	108	-	59
205	73	72	27	199	65	29	-

d) 調査対象者の概要

調査対象者の年齢は25才から40才前半に分布し、その平均年齢は2Kで31.8才、2DKで28.7才、2LDKで31.5才、3Kで33.7才、3DKで36.6才であった。また、家族構成は、75.7%が子供1~2人の夫婦家族(平均家族数3.6人)で、住居規模が大きくなるにつれ、家族員の年齢、平均家族数が高くなる傾向にあった。

対象家庭の平均家族数を表1に、家族構成・居住年数を表5に示した。

3. 調査結果と考察

3.1. 諸室の利用概要と広さ意識

寝室(本報では夫婦または主婦の寝室を言う)における生活様式は、和式が94.8%で殆どであり、洋式は2戸0.5%と僅かであった。また寝室で行なう就寝以外の生活行為は「着換え」が一番多く55.5%の住戸で行なわれ、休息37.1%、団らん31.4%、育児25.7%であった。就寝の仕方が一番多い型は「夫婦と子供が別々に就寝する」ものが50.5%を占め、次に「主人・主婦・子供が別々に就寝する」もの25.2%と続いた。これは「子供の年齢に関係なく分離する(29.2%)」「学令前3才ぐらいから分離する(31.9%)」「小学校入学から分離する(24.5%)」という、親子の就寝分離についての考え方から来たものと思われる。

寝室の広さ意識については、「やや狭い」が30.5%、「かなり狭い」が32.4%、「非常に狭い」が28.8%でほとんどの者が狭いと感じ「かなり広い」「やや広い」「ちょうどよい」と感じる者は合わせて5.7%と僅かである。

台所の形式は、台所のみ単一機能であるK型が41.9%、食堂と台所併用のDK型が44.5%、居間・食堂・台所併用のLDK型が13.6%であった。これを実際の使い方から分析すると、DK型60.2%、LDK型23.6%と増し、襖・ガラス戸の間仕切りを取り払うなど住み方による改良が多くの住居で行なわれていた。食堂・台所で行なわれる食事・調理以外の行為としては、「団らん」48.8%「家事労働」47.4%であった。また食事の取り方については、家族全員が揃って食事する家庭が25.0%、だいたい揃って食事する家庭が34.0%で、食事を中心に家族内の交流が自然に行なわれるように配慮されていると思われる。

台所の広さ意識については、「ちょうどよい」が僅かに増えた程度で寝室の場合と同様な傾向が見られた。

浴室については、殆どの家庭が和式浴槽を使用し、入浴の仕方では、家族1人1人で入浴するものが28.8%、親と子供と一緒に入浴するものが47.0%であった。浴室における入浴以外の行為には、洗濯、脱衣、洗面などが

考えられたが、その中で「洗濯」が40.5%で一番多く「脱衣」12.1%「洗面」8.3%であった。また、浴槽の広さでは、43.3%の者が「やや狭い」と感じ、洗い場の広さでも、同様に「やや狭い」と感じる者が37.9%であった。浴室全体への広さ意識は「ちょうどよい」と感じる者は10.7%で、87.0%の者が「狭い」と感じていた。便所の広さ意識では、43.3%の者が「やや狭い」と感じていた。

3.2. 空間認識に影響を与える基本的要因と広さ意識の関係

居室の空間認識に影響を与える種々の基本的要因から居室の設計要因として「住居形式」「居室の広さ・形式」「開口部の広さ」「収納スペースの広さ」を、居室利用者による経年変化要因として「家族構成」「居住年数」「居室の利用方法」「家具の配置と保有量」「居室の有効床面積」を考えた。

a) 寝室の広さ意識について

寝室の広さ意識と設計要因との関係には、経年変化要因の「家具の配置と保有量」による影響が感じられた。また、「寝室の広さ意識」と「収納スペースの広さ意識」の間には「収納スペースを広く感じる者ほど寝室を広く感じる」と言った正比例関係が見られた。「寝室の広さ意識」と「開口部の広さ意識」との間にも同様に正比例関係が見られたが「家具の配置と保有量」からの影響も考えられ明確な把握は困難であった。また、「家族構成」による影響も見られたが、就寝の仕方・住居形式などにより実際の生活では、かなり緩和されていると思われる。例えば「夫婦と子供3人」の寝室の広さ意識「やや狭い(14人)」は、規模の大きい3K, 3DK居住者によるものであり、「夫婦と子供2人」の「非常に狭い(65人)」は、規模の小さい2K, 2DK居住者によるものである。このことから、寝室の広さ意識には家族数と個室数の関係からの影響が考えられた。但し、個室相互の関係に影響する住居形式そのものの影響については明らかに出来なかった。

b) 台所の広さ意識について

台所の形式と台所の広さ意識との間には、台所だけの場合より、機能的には複雑になるが広いスペースを持つ食堂や居間と併用のDK型, LDK型の方が広く感じている。これは、時間帯による行為のズレを考慮に入れた結果と思われ注目したい。また収納スペースとの間には、寝室と同様の傾向が見られた。経年変化要因の「居住年数」と「台所の広さ意識」の間には、長く居住するほど狭く感じる傾向があり、家族構成員の体格の成長と食器棚・冷蔵庫・電子レンジなどの家具の増加によるも

表4. 空間認識に影響を与える基本的要因(その1)と諸室への広さ意識の関係 (人)

	諸室の広さ意識							無回答	計
	非常に広い	かなり広い	やや広い	ちょうどよい	やや狭い	かなり狭い	非常に狭い		
居室の広さ意識	2	4	18	128	136	121	11	420	
居室の広さ	6畳	2	4	13	51	56	48	3	177
	4.5畳			5	71	76	68	8	228
	3畳						1		1
	不明				6	4	4		14
居室開口部への広さ意識	非常に広い					3	1		4
	かなり広い					3	1		4
	やや広い		1	2	4	5	9		21
	ちょうどよい	2	3	15	104	82	72	8	286
	やや狭い			1	19	35	24	3	82
	かなり狭い						8	9	17
	非常に狭い							4	4
無回答					1		1	2	
居室収納スペースへの広さ意識	非常に広い								0
	かなり広い	1							1
	やや広い		3		2				5
	ちょうどよい			13	10	6			29
	やや狭い			4	95	25	11	6	141
	かなり狭い		1	1	19	97	22	1	141
	非常に狭い	1			1	8	87	4	101
無回答					1		1	2	
台所の広さ意識	2	4	40	145	127	100	2	420	
台所の形式	K			3	30	70	73		176
	D・K	1	3	30	81	48	24		187
	L・D・K	1	1	7	34	9	3	2	57
台所開口部への広さ意識	非常に広い	1			1	2			4
	かなり広い			1	3	2			6
	やや広い		2	2	2	1			7
	ちょうどよい	1	2	37	103	49	24	1	217
	やや狭い				28	39	24	1	92
	かなり狭い				7	28	19		54
	非常に狭い					1	6	33	40
無回答								0	
台所収納スペースへの広さ意識	非常に広い								0
	かなり広い				1				1
	やや広い		4	2	1				7
	ちょうどよい	1		26	5	1	1		34
	やや狭い	1		11	112	17	2		143
	かなり狭い			1	25	90	11	1	128
	非常に狭い				1	19	86	1	107
無回答								0	
浴室の広さ意識		2	45	190	108	72	3	420	
便所の広さ意識		1	78	180	92	66	3	420	

表5. 空間認識に影響を与える基本的要因(その2) 一.
...と広さ意識との関係(単位人)

表5. 凡例

- A. 就業の仕方
 イ 夫婦と子供が別々に就業する。
 ロ 主人と主婦・子供が別々に就業する。
 ハ 主人・子供と主婦が別々に就業する。
 ニ 主人・子供と主婦・子供が別々に就業する。
 ホ 主人、主婦、子供が別々に就業する。
 B. 食事の取り方
 イ 全員そろって取る。
 ロ だいたい全員そろって取る。
 ハ 皆バラバラに取る。
 ニ 日により違う。

年数	居住	就業	食事	就業の仕方				意識				空間認識				就業の回数						
				夫婦	夫婦と子供1人	夫婦と子供2人	夫婦と子供3人	無	イ	ロ	ハ	非常	かなり	やや	かなり	非常に	無	100	127	145	40	
1	5	18	8	10	11	4	2	17	14	15	1	9	15	14	7	29	7	1	8	1		
2	7	14	7	12	5	3	1	19	13	1	6	1	8	15	11	10	24	12	1	7	1	
3	10	21	14	18	3	2	2	27	28	7	2	15	3	14	32	1	1	5	29	16	1	
4	9	12	9	11	3	6	26	9	3	10	5	11	18	1	11	16	15	1	1	15	3	
5	8	15	9	16	7	4	6	27	18	17	3	13	25	1	17	18	1	1	4	21	14	
10	54	45	10	24	6	7	16	85	25	6	41	8	18	70	6	38	51	38	5	1	14	40
15	11	5	2	6	6	2	7	1	8	7	5	4	1	1	1	1	1	1	1	1	3	10
無	1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計	199	34	22	40	46	4	10	35	1	2	27	54	3	33	43	32	7	1	1	17	59	62
無	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
15	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
無	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
合計	199	34	22	40	46	4	10	35	1	2	27	54	3	33	43	32	7	1	1	17	59	62

のと思われ「家族構成」「家具の保有量」の影響が見られた。

c) 浴室・便所の広さ意識について

浴室・便所の広さ意識と設計要因との間にも、上記「寝室」「台所」と同様の傾向が見られたが、経年変化要因の間には、ほとんど関係が見られなく、すべての場合において「やや狭い」を中心に分布していた。これは、寝室・台所に比べ浴室・便所での行為が家族構成などの経年変化により、利用方法を変化させることが容易なためと、利用面から経年変化要因に左右されない行為のためと思われる。

3.3. モデル空間での広さ意識と諸室での広さ意識の関係

a) モデル空間での実験方法

図2の様な住空間を一次的に規定する空間構成要素を自由に変化させることのできるモデル空間を作った。なお、空間構成要素は、床面積(1.5・3・4.5・6畳)天井高(195・210・225・240・255cm)照度(0・20・40・60W)とした。

実験は、愛知工業大学学生男女各3人、計6人の被験者により各要素を一度に一要素ずつ変化させて行なった。被験者は、1人ずつモデル空間内に入り、真暗の場合は、空間内で30秒間自由に行動し、照明のある場合は、空間内3ヶ所に置かれた小箱を持って出る。外に出たところで空間から受けた感じを、表6のイメージ語について、7段階の尺度上に評定してもらった。

実験データの分析は、主にイメージ語の評定について「中央値のプロフィールによる比較」「 χ^2 検定による比較」を行ない、床面積・天井高・照度の空間構成要素が広さ意識におよぼす影響を探った。

b) モデル空間での広さ意識

空間構成要素の変化による空間のイメージは、「床面積が広いほど、明るいほど、自由な感じを受ける」「天井高が同一で、明るいほど、床面積が狭いほど、天井高を高く感じる」「明るさが同じでも、床面積が広いほど暗く感じる」「床面積が広く、天井高が高いほど、また明るいほど、開放的であると感じる」「1.5畳、3畳では照度・天井高に関係なく狭いと感じ、4.5畳、6畳では、照るいほど、天井が高いほど、床面積が広いと感じる」の傾向が見られる。床面積に対する広さ意識の変化を表7に示した。

c) 空間構成要因と空間認識の影響要因との関係

空間構成要因の中から床だけについて考えると次のとおりである。

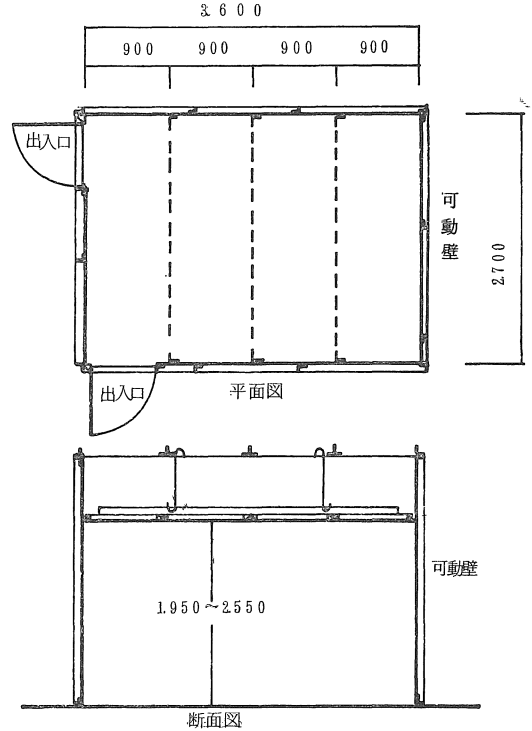


図2. モデル空間の概要 (単位mm)

表6. 実験に用いたイメージ語対

1. 間口が広い	1-間口が狭い	11. 支配的	1-服従的
2. 束縛された	1-自由な	12. 愉快的	1-不愉快的
3. 安全な	1-危険な	13. 閉鎖的	1-開放的
4. 天井が低い	1-天井が高い	14. 調和のない	1-調和のある
5. 居心地のよい	1-居心地の悪い	15. 陰気な	1-陽気な
6. やわらかい	1-かたい	16. 面積が狭い	1-面積が広い
7. 暗い	1-明るい	17. 落ち着きのない	1-落ち着きのある
8. 活動的	1-非活動的	18. 安心な	1-不安な
9. 温かい	1-冷たい	19. 緊張した	1-のんびりした
10. 興行が浅い	1-興行が深い	20. ゆつたりした	1-窮屈な

表7. 床面積と広さ意識の関係

床面積	床面積に対する広さ意識
1.5 畳	照明、天井高に関係なく狭く感じる。
3.0 畳	照明、天井高に関係なく狭く感じる。
4.5 畳	照明40W以下では、天井高240cm以下で狭く感じていて、その他は、ちょうどよいと感じている。
6.0 畳	照明に関係なく、天井高210cm以下で狭く感じて、天井高240cm以上では、広く感じている。

広さに影響を及ぼす要因	就寝される部屋の広さ意識																																						
	4.5畳以下									4.5畳									4.5畳以上																				
	非広 さに 対し	-3	-2	-1	0	1	2	3	無 回 答	合 計	非広 さに 対し	-3	-2	-1	0	1	2	3	無 回 答	合 計	非広 さに 対し	-3	-2	-1	0	1	2	3	無 回 答	合 計									
家族構成								1	1									5	71	76	68	8	228									2	4	13	51	56	48	3	177
夫婦のみ								0	0									9	12	3		24									1	5	7	4	3	1	21		
夫婦と子供1人								0	0									13	25	24	1	66									1	4	14	17	8	2	46		
夫婦と子供2人							1	1										1	36	33	31	6	107									1	1	4	21	27	30		84
夫婦と子供3人								0	0									6	2	5	1	15									1	1	7	6	4		18		
その他								0	0									7	4	5		16									1		2	2	3		8		
無回答								0	0									7	4	5		16											2	2	3		0		
住戸形式								0	0									6	8	4		18									1	1	1	8	10		21		
2K								1	1									9	20	16		45									1	1	2	12	16	10	1	41	
2DK								0	0									4	4	3	1	10									1	1	6	5	2		16		
2LDK								0	0									3	38	27	32	1	101									1	1	6	9	7	10		54
3K								0	0									2	18	21	16	7	64									2		6	11	8	1	33	
3DK								0	0									10	7	5	1	23									1	1	5	8	6	6	1	27	
居住年数								0	0									7	8	13		28									2	1	6	5	2		16		
1年未満								0	0									1	14	8	13	1	37									1	3	5	9	6		24	
2年以上								0	0									1	4	12	4	1	22											2	1	3		6	
3年以上								0	0									1	10	11	9		31									1	1	16	9	11	1	38	
4年以上								0	0									1	24	28	20	5	78									1	4	12	23	17	1	58	
5年以上								0	0									2	2	4		8											2	3	3		8		
10年以上								0	0									1	1			1														0			
15年以上								1	1									1	1			1														0			
無回答								0	0									2	38	38	34	5	117									1	4	6	24	31	21	2	89
就寝の仕方								1	1									12	16	15		43											5	8	10	5		28	
(主人+主婦)・(子供)								0	0									1	1			2														0			
(主人)・(主婦+子供)								0	0									4	1	3	2	11											2	1	6		9		
(主人+子供)・(主婦)								0	0									2	16	19	15	1	53									1	2	17	14	14	1	49	
(主人)・(主婦)・(子供)								0	0									1	1			1														2	2		
無回答								0	0									0	0	0	0	0									1		3				4		
有効面積								0	0									1		4		5									1	2	9	36	41	33	3	125	
6畳								0	0									11	12	5		28									2	2	8	11	13		36		
6畳~4.5畳								0	0									59	62	57	8	191											2	1			3		
4.5畳								0	0									2	2			4											2	3	1		6		
4.5畳~3畳								1	1									5	59	62	57	8	191											2	3	1		6	
3畳								0	0									2	2			4											2	3	1		6		
無回答								0	0									3	52	54	49	3	161									2	8	44	40	34	2	130	
主要家具の種類								0	0									1	44	47	46	5	143									2	3	25	25	25	1	87	
和洋ダンス								0	0									1	9	6	12	1	29									2	2	7	25	25	33	1	95
鏡台								1	1									11	17	9	3	40									1		6	16	16	25	1	65	
テレビ								0	0									11	17	9	3	40											6	16	16	25	1	65	
本棚								0	0									11	17	9	3	40											6	16	16	25	1	65	

表8. 空間認識の影響要因と床面積別に見た寝室の広さ意識 (単位人)

モデル空間での広さ意識では、床面積 4.5畳の時「ちょうどよい」と感じるケースが多く見られる。この床面積を境に4.5畳以上、4.5畳、4.5畳以下の3種に分け「諸室における広さ意識調査」の結果を対応させた。

寝室の場合を表8より見ると、寝室の床面積、有効床面積において、4.5畳より4.5畳以上に多くの「ちょうどよい」と答える者がおりモデル空間での実験値に違いが見られた。4.5畳と4.5畳以上の空間認識に影響を与える基本的要因を比較すると、僅かながら4.5畳より4.5畳以上に、家族構成・住戸形式・居住年数・就寝の仕方・主要家具の種類などによる広さ意識への緩和が感じられた。

台所においても同様の傾向が見られた。以上より、モデル空間における「ちょうどよい」広さの4.5畳では、住生活に対応させることが難しく、広さへの不満が多くなると思われる。

4. おわりに

以上諸室における広さ意識調査とモデル空間による広さ意識調査の結果を対応させ、住空間を構成する要因の影響力を探った。

広さ意識調査では、部屋の広さに対する意識と、収納スペースの広さに対する意識との間に特に強い相関がみられ、生活に必要な諸資材や収納家具が生活空間を圧迫していると思われた。また、今回の対象住戸の様な小規模な住宅では、一室に多くの機能を持たせなければならず、そのため一層家具が増え累加的に室内空間が狭くなり、モデル空間での無性格な4.5畳以上の空間で広いと感じる結果にもかかわらず、生活空間になると狭い空間に感じられると考えられる。

今回の調査から、経年変化要因の家族構成、居住年数、住戸形式が広さ意識に影響を与えることが伺えたが、その影響の大きさ、相互関係まで探ることは出来なかった。さらに研究を掘り下げて行きたい。